共通小論文

時間　90分

次の文章は、日本文学研究者・益田勝実が中学校・高校の古典文学教育について書いた「古典文学教育についてまたが問題なのか」（『国語教育論集成 益田勝実の仕事 5』ちくま文庫、収録）という評論の一部です。文章を読んで以下の設問に答えてください。

巷間喚起の古典文学全集の中に、出来上つためいめいの文学の古典が持ちうけているのではない。いまほどのあらゆる価値の転換期に、どうして前代からの古典文学の目録どおりの継承がありえよう。教師はめいめいの文学の古典を求めて探索し、その探索の過程に学習者を同伴し、学習者も自己の古典を上手に探すようになる。学校の古典文学教育は、古典再発見（のプロセスであり、プロセス以外ではない。古典があるから学習が開始されるのでなく、古典を求めて学習がはじまる。教師は経験を活かして多くの資料を提供する。初登攀者を案内する山案内人のように、案内しつつ励みずからも初登攀者をなどとげるだろう。登山と違うことは、その場合、両者のきわめる山頂が同一とはかぎらないことである。

現代に生きる若い学習者に、手持ちの日常のことばの一時の死を体験させるほどの、現代に対時し、現代を拍つことばの装術は、いったいどこにあるか。もちろん、わかりはしない。

天にとよむ大めし
あけもどろの、はなの
さいわたり、あれよ
みれよ、きたちやよ

（『台原善恵おもろ新釈』に拠る）

天に響む大主（大君）
明けもどろの花の
咲いわたり、あれよ！
見れよ！　美らやよ！

沖縄の「おもろさうし」のオモロの、この大陽讃歌を採り入れない、わたしは、わしの教室の若者たちとの古典探索に出かけられることが、どうして出来ようか。オモロは、これまでの日本文学の既成の古典通念には含まれていない。しかし、それは、わたしにとつてはどうでもいいことである。

え、け、あがる三月は　　あれ！　あがる三月は
え、け、かみぎや、かなまゆみ　　あれ！　神のかな真弓
え、け、あがる、あかばしや　　あれ！　あがる赤鳥は
え、け、かみぎや、かなまき　　あれ！　神のかな柾矢
え、け、あがる、ぼれぼしや　　あれ！　あがる群れ星は
え、け、かみが、さしくせ、　　あれ！　神のさし櫛
え、け、あがる、のぐもは　　あれ！　あがる横雲は
え、け、かみが、まなきよおび　　あれ！　神の愛御帯

オモロの詞章が内蔵することばのリズムは、これまでの古典文学の学習指導が一様に排斥した暗誦の欲求を、おしとどめることを出来なくしてしまう。

一人の女がやや腰を曲げ目をかたくつぶつて、盲人の身振りをしながら杖をついて家の中へ入つて来て次のように歌う。

浜の方で　　pin-ta nagoe
音がする　　hunpo yee
鳥たろうか　　chidoo ba an
音がする　　hunpo yee
水鳥だろうか　　tori ba an
音がする　　hunpo yee
何か跳ねているよ　　yan wa an na
音がする　　hunpo yee
目の見える人たち　　hikanaa-nitar
行つてごらんよ　　aap wa ikiee yan
音がする　　hunpo yee

すると家の中にいた人々は一斉に起つて手を打ちながら次のような歌を歌つて踊る。

おお天降つた　あそこに　　hee nai too
本当に天降つた　あそこに　　uu nai too
神が天降つているよ　　kamuy nai na
あそこに天降つているよ　　too nai na

（知里真志保『アイヌ文学』に拠る）

北海道の帰別のアイヌの人たちの鯨祭では、浜にいわゆるアミを迫つてきてのしあげた鯨神の到来を、この儀礼を伴うウポポ（唄）で実演する。アイヌ語で踊り必要があるとはいわないが、「ランポエー」のくりかえしが作り出すリズムだけは、こわさずに取りとめておきたい。原始的ないし古代的な想像力が、いかに現代人に喪つた自己を感じさせるか、いかにことばの現代語と違う用法の存在を想起させるか。それを呪術のことばとして重視するとき、われわれはいやおうなしに自己から次第させてしまうものことを、わたしは考えてみたい。『出雲国風土記』のヤツカラズオミツノミコトの国引きの詞章などは、

「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国なるかも。初国小さく作らせり。かれ、作り縫はなと詔りたまひて、「栲衾、志羅紀の三埼を国のあまりありやと見れば、国のあまりあり」と詔りたまひて、童女の胸鉏取らして、大魚の鰭衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の網うちかけて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、「国来、国来」と引き来縫へる国は、去豆の折絶より八穂爾支豆支の御崎なり。

というかたちのこと特有のレトリック、イメージとことばのからまりあい、日常語の用法に馴らされたわれわれを驚かす。この語法を高校生にむつかしすぎるという人がある。わたしは少しもそう思わない。現代語訳を添えておいて、数遍くりかえし読まされれば、現代人には斬新きわまるリズミカルなかたりことばが、おのずから彼等の口をついて出てくる場合が多い。文学の古典の探索は、なによりも、喪失した人間性と見失つた多様なことばの用法を、回復する手がかりたりうる文学の探索でなければならない。「衝撃を受けることばを尋ねていく、旅でなければなるまい。

※益田勝実（ますだかつみ）…日本文学研究者。2006年『益田勝実の仕事』全5巻で、毎日出版文化賞受賞。おもな研究対象は古代文学。また、国語教育の分野でも、積極的に発言をしている。その仕事の質の高さ、豊富さから「国文学の巨人」とも称される。主な著書に『火山列島の思想』（1968年、筑摩書房）、『秘儀の島』（1976年、筑摩書房）など。

設問一

文中の傍線①「前代からの古典文学の目録」について、同じ意味で使われている語を本文から二〇字以内で抜き出しなさい。

設問二

文中の傍線部②「この大陽讃歌を採り入れない、わたしは、わたしの教室の若者たちとの古典探索に出かけることが、どうして出来ようか。」について、この理由としてもつとも正しいものを、次のうちから一つ選びなさい。

ア　この作品が沖縄のものだから。
イ　『おもろさうし』という作品を多くの若者が知らないから。
ウ　このような大陽賛歌の作品が日本文学には他には無いから。
エ　オモロは、これまでの日本文学の既成の古典作品には含まれていないから。

設問三

文中の傍線③「衝撃を受けることばを尋ねていく、旅でなければなるまい。」について、古典文学だけではなく、近現代文学、さらにはマンガやアニメーションなどの作品も含めて、あなたにとってこのような経験があるなら、それについて四〇〇字以上六〇〇字以内で自由に書きなさい。もし、経験がない場合は、その理由について同字数で書きなさい。

学習のポイント

小論文試験の評価の対象になるのは、課題の正しい読解、読む人を念頭に置いた日本語の使用、記述の論理的な展開などです。試験対策としては、日頃からまとまった分量の論説文・評論文を読む習慣をつけましょう。その際、わからない言葉にぶつかったら必ず辞書を引いて意味を調べてください。文章を読み終わったら、その主旨を一文にまとめましょう。論説文・評論文とは、この主旨を読者に納得させるための文章です。段落構成に注目しながら、各段落が果たしている役割――問いを立てる、予想される反論に応える、結論を述べる、など――を理解し、もう一度、全体の文章を要約しましょう。その際、「つまり」や「とはいえ」、「たとえば」といった接続詞を効果的に用いることがポイントです。読んだ文章についてのコメントをまとめておくことも大切です。目にとまった表現などをノートに記録し、繰り返し参照することによって、優れた表現を自分でも使えるようにしてください。